

第90回 全国高等学校野球選手権大会

平成20年8月2日(土)～18日(月)
阪神甲子園球場

1回戦 4日(月) (審) 堅田、野口、谷口、松成

| チーム | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 計 |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|
| 本 荘 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 | 3 |
| 鳴門工業 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2x | 4 |

本塁打：安岡(鳴)
二塁打：阿部、池田(本)

| | 打数 | 安打 | 犠打 | 四死 | 三振 | 盗塁 | 残塁 | 失策 | 併殺 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 本 荘 | 34 | 10 | 1 | 1 | 7 | 0 | 6 | 2 | 0 |
| 鳴門工業 | 29 | 7 | 4 | 10 | 9 | 1 | 14 | 1 | 2 |

・バッテリー
本 荘：池田(8¹/₃) — 片村 鳴門工業：実(9) — 佐藤

| 【本 荘】 | 打数 | 安打 | 打点 | 三振 | 四死 |
|-------|----|----|----|----|----|
| ⑤ 田 村 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| ③ 井 島 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| H 菊 地 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 3 梶 原 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ② 片 村 | 4 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| ④ 吉 尾 | 4 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| ⑧ 土 田 | 4 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| ⑦ 阿 部 | 4 | 3 | 1 | 0 | 0 |
| ⑨ 吉 田 | 4 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| ① 池 田 | 4 | 1 | 2 | 0 | 0 |
| ⑥ 河 本 | 4 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| | 34 | 10 | 3 | 7 | 1 |

| 【鳴門工業】 | 打数 | 安打 | 打点 | 三振 | 四死 |
|--------|----|----|----|----|----|
| ⑦ 園 田 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 7 安 田 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ⑧ 植 木 | 4 | 1 | 0 | 1 | 1 |
| ② 佐 藤 | 2 | 0 | 0 | 2 | 1 |
| ⑥ 安 岡 | 2 | 1 | 1 | 0 | 3 |
| ⑨ 岡 山 | 1 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| ③ 賀 川 | 4 | 2 | 2 | 0 | 0 |
| ⑤ 松 浦 | 5 | 2 | 1 | 0 | 0 |
| ① 吉 実 | 3 | 0 | 0 | 3 | 0 |
| ④ 西 内 | 3 | 0 | 0 | 3 | 1 |
| | 29 | 7 | 4 | 9 | 10 |



【本荘—鳴門工】 9回表1死一塁、本荘・阿部の二塁打で一走吉尾(中央)が同点のホームを踏み、笑顔でガッツポーズ＝甲子園球場
(秋田さきがけ 8月5日付)

池田 気迫の179球力尽く

最後に投じた179球目は、左腕手の頭を高くと越え、フェンス上の金網に当たって芝生の上を転がった。悪夢のような幕切れ。マウンド上の本在のエース・池田恭介（3年）は、ぼろぼろと打球を見つめていた。「ああ、終わっただんだ」と思いました。淡々とした口調が、逆に敗戦のショックを際立たせた。

この日の池田は、二死後に連続四死球で満塁のピンチを

熱戦譜

迎えるなど、初回から制球に苦しんだ。それでも一試合中にうまく調整できた」というように、我儘のピッチングを続けた。九回には白らのバットで勝ち越しの適時打。「ついででくれたみんなのため、打ててよかった」と、ほんの少し笑顔がのぞいた。

だが、池田は追い詰められていた。鳴門工打線の粘り強

【本荘―鳴門工】制球に苦しみながらも力投した本荘・池田投手―甲子園



い攻撃に、八回を終えた時点球粘られた末、右前に運ばれ、180球を投げ、タフな左腕も「力が入らなかつた」池田。九回裏、先頭打者に7

自ら勝ち越し打 九回 腕の振りには限界

したくなかった。集中力が切れてしまった」。気持ちの切り替えができないまま、五番にストレートの四球を与えると、6、7番に連打を浴びて無念のサヨナラを喫した。

2年前、池田は甲子園でボールボーイを務めた。躍動する先輩たちの後ろ姿を間近に見ながら、「いつか自分も」という思いをずっと抱き続けてきた。

秋田大会からすべての試合を一人で投げ抜いてきたエースの胸には「一騎当千」の4文字が書かれている。「ピッチャーは、一人で相手チームのすべての打者と向き合えないといけない。そのため的心構えです」。

189球の小柄な投手は、その思いを胸に最後まで一人でマウンドに立ち続けた。自分の力が足りなかつた。却えて終わりがたかつた。持てる力を大舞台で出したはずなのに、エースは最後まで自分に厳しかった。

(秋田さきがけ 8月5日付)